

京への道は袋川の シンボル智頭橋から

ち ず 智 頭 橋



智頭往来は鳥取城下から千代川沿いに河原・用瀬・智頭を通り志戸坂峠に至る道で、国道 53 号、国道 373 号はほぼそのルートを踏襲しています。古くから因幡と畿内方面を結ぶ道で、国司の赴任時にも利用されたように、別名上方往来とも呼ばれていました。また、鳥取藩の参勤交代路で城下の目抜き通りを通るためか、智頭橋は他の橋よりも立派に造られていたそうです。

智頭橋は、元和 5 年（1619）池田光政が鳥取城下町の拡張によって新しく開削した袋川に架けられたもので、若桜橋、鹿野橋、鋳物師橋、出合橋とあわせた 5 橋のひとつです。これらは藩橋といわれ、修築は藩によって行われましたし、流失を防ぐ方法も決まっていました。

『鳥取藩史』によると、城下の造り酒屋に命じて 3 尺桶 2 本を出させ、橋上で水を入れるか、あるいは大石を数十個で重石とする、大綱で橋脚をつなぐといったことで対処しましたが、大洪水の際には流失は免れなかったようで、江戸時代に少なくとも 4 回流失しています。桶を橋上に置く方法は、昭和 25 年キジア台風時に錦帯橋でも行われましたが、やはり豪雨によって流失しています。

明治時代には鉄製の高欄が取り付けられ、昭和 27 年（1952）の鳥取大火をきっかけに現在の橋（長さ 26m、幅 15m、鉄筋コンクリート製 3 径間ラーメン橋）が昭和 31 年に架けられました。また、大火から立ち上がった鳥取にふさわしい町づくりとして、平成 5 年（1993）には智頭橋に隣接して広い歩道橋が造られました。「きなんせ広場」と名付けられ、鳥取の町を代表する 1 唱歌「ふるさと」にちなんだ童像、2 池田家の家紋「揚羽紋」、3 伝統芸能「因幡の傘踊り」、4 自然の豊かさ「滝と広葉樹」、5 こどもの夢を育てる「水に浮かぶ石」という 5 つのメッセージが発信されています。

■位置図



智頭橋



自然の豊かさを表す滝と広葉樹



きなんせ広場へのスロープ



智頭橋歩道橋

平成 5 年（1993）に隣接して造られた歩道橋。高欄にはデザインされた池田家の家紋がはめこまれ、ベンチや彫刻、樹木がしつらえられている。